

◆書評◆

パトリシア・ヒル・コリンズ／スルマ・ビルゲ著
小原理乃訳／下地ローレンス吉孝監訳

『インターセクショナリティ』

(人文書院 2021年 ISBN 978-4-409-24144-8 3800円+税)



飯野 由里子

(東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター)

私たちの間には多様な差異があり、それらの間には権力関係(有利-不利の関係や支配-被支配の関係など)が存在している。しかも、差異の間に存在する権力関係は、たった一つの軸で(男女という意味での性別のみによって)決まるわけではない。その他の社会的カテゴリー(人種やエスニシティ、国籍、年齢、性的指向・性自認のあり方、障害の有無)にもとづく軸が互いに交差することで、私たちの間に複雑な権力関係を生じさせている。このため、「女性」だからと言って、みんながみんな同じ社会的位置に置かれているわけではないし、その結果として、同じ経験を共有しているわけでもない。また、私たちはそれぞれ、複数の社会的カテゴリーに同時に属している。この点をふまえると、私たちの間に存在する権力関係も、文脈に応じて、複雑な形態をとることになる。この点を押さえていないと、差別や抑圧、不平等の原因を単純化して(男性による女性

身体への支配にのみ原因があるなどと)理解してしまうことになる。実はこうした「失敗」を、マジョリティ女性を中心としたフェミニズムは繰り返してきた。

そのようなフェミニズムに対抗するものとして、古くは19世紀後半から、一般的には1960年代、70年代から主張・展開されてきたのがインターセクショナリティ(交差性)を重視したフェミニズムである。押さえておくべきは、こうしたフェミニズムはマイノリティ女性たちが育んできたという点である。インターセクショナリティ概念が登場・発展してきた背景や歴史は本書第3章にまとめられているが、著者もそこで、インターセクショナリティは「いわゆる第二波ホワイト・フェミニズムから派生したものではなく」(116頁)、非白人の女性たち、すなわち「ブラック、チカーナ、アジアン・アメリカン、そして先住民族の女性たちの知的生産と活動」(同上)から登場してきたも

のであることを繰り返し強調している。

では、マイノリティ女性たちのフェミニズムにおいて重視されてきたインターセクショナリティとは、どのようなものなのだろうか。著者によれば、それは「世界の複雑さを理解し分析する」(57頁)のために、「人を同質的で画一的な個人の集合体として見るのではなく、人種、階級、ジェンダー、年齢、市民権(シティズンシップ)の状態をはじめとしたいくつかのカテゴリーが、世界の中で人々をどのように位置づけているか説明するための枠組み」(38-39頁)のことである。これに、私たちの間に存在する権力関係は、文脈に応じて、複雑な形態をとるという前述の論点を加えると、インターセクショナリティとは、多様な人びとの間に複数性・複雑性を伴った形で存在する権力関係と、そうした権力関係によって構造化される差別や抑圧、不平等にアプローチするための枠組みであると言える。それは、世界の複雑さを軽減せず(問題の原因をひとつやふたつに還元することなく)差別や抑圧、不平等を説明し、それらと闘っていくことを可能にする。

しかし、近年の、とりわけアカデミアを中心とした議論において、インターセクショナリティは、差別や抑圧、不平等の「説明」にとどまっており、それらとの「闘い」に接続されていないのではないか、あるいはそうした「闘い」を軽視しているのではないか、と著者は問う。その上で次

のように述べる。「インターセクショナリティの既存の議論の中には、インターセクショナリティに関する知識を現場で活かしていく(展開していく)実践——特に複雑な社会的不平等がもたらす社会問題を批判し、拒否し、そして改善しようとする諸々の実践——を軽視しているものがある」(64頁)。著者は、実践を軽視した議論は、たとえインターセクショナリティの枠組みを用いた分析であったとしても、十分に批判的なものではないと言う。なぜなら、『批判的(クリティカル)』という用語は、社会的不正義の状況下において起こる社会問題を批判し、拒否し、解消しようとすることを意味する」(106頁)からだ。したがって、インターセクショナリティを用いた分析は、「単に世界を説明するだけではなく、社会問題に抵抗する分析」(同上)でなければならず、また、マイノリティの「コミュニティや個人のエンパワーメントを支援すること」(70頁)へとつながっていくものでなければならぬ。

こうした立場から、本書では、インターセクショナリティを批判的なツールとして用いている(と著者が評価する)さまざまな取り組みが紹介される。たとえば、第1章では、ブラジルにおける黒人女性運動の一例として、2014年にブラジルの首都ブラジリアで開催されたフェスティバル「ラティニダーズ第七回年次大会」が紹介される。著者は、さまざまな地域から、

さまざまな立場の人びとが、さまざまなテーマのもとに集ったこのフェスティバルは「知的取り組みと活動家の取り組みの相乗効果(シナジー)を反映」(48頁)した場であったと評価する。その他、批判的な探求と批判的な実践の相乗効果(第2章)が見られる事例として本書が紹介する社会運動は多岐にわたる。そこには、1994年にアメリカ合衆国のブラック・フェミニストが提唱したリプロダクティブ・ジャスティスの実現に向けた取り組み(第4章)の他、2013年のラナ・プラザの惨劇後に展開された新自由主義に対するグローバルな抗議活動(第5章)や監獄産業の急成長や警察の軍事化により強化されるマイノリティと貧困コミュニティに対する差別的な取り締まりへの抵抗(第5章)が含まれる。さらには、デジタル・メディアやソーシャル・メディアを活用した社会運動及びデジタル・バイオレンスとの闘い(第4章)やヒップホップを通してグローバルに発信される抵抗の声と物語(第6章)なども取り上げられている。世界中で展開されているさまざまな社会運動において、インターセクショナリティにもとづく分析がどのように実践されているのか学べる点に、本書の大きな特徴がある。

また、大学関係者にとっては、インター

セクショナリティと教育の関係に焦点をあて、近年、大学において積極的に取り組まれているダイバーシティ推進を批判的に検討した第7章は必読である。ここで著者は、ダイバーシティ推進の取り組みが、たとえば大学へのアクセスのしやすさ／しにくさなどに反映される「社会的不平等の構造的分析を切り捨て、社会問題の個人的及び文化的(カルチュラル)な解釈を重視」(301頁)したものになっていないか、その結果として「生徒・学生同士が仲良くできないとしたら(中略)問題は生徒・学生自身にある」(同上)という理解にとどまっていないかと問い、「社会問題に対する個々の解決策を必要以上に重視する」(302頁)風潮に警鐘を鳴らす。日本でも、過去20年の間、「自己責任」論(人びとが直面するさまざまな問題を個人の能力や選択の帰結とみなす考え方)を当然視する風潮が継続・強化されており、その結果として、すでに社会的に脆弱な立場に置かれていた人びとが、これまで以上に不利な立場に追いやられてしまっている。本書は、現代社会が直面するこうした問題を構造的に理解し、より適切かつ創造的な問題解決方法を模索していく上で、インターセクショナリティにもとづく分析が欠かせないことを力強く訴えかけている。